

日本語と日本語話者の多様性に対する理解育成の実践モデル構築

米本和弘（東京医科歯科大学 統合国際機構 助教）

【研究の概要】

本研究では、日本の小学生を対象に、日本で学ぶ留学生との交流活動を通し、日本語や日本語話者の中に存在する多様性に対する意識を高める方法について、実践に基づきまとめることを目的とした。

【問題意識】

本研究の研究者の所属機関では、留学生との交流を通し多様性に対する意識を高めることを目的に、近隣の小学校で国際交流活動を実施している。ただ、このような交流活動は、英語学習の一環として行われることが多く、言語や話者の多様性に対する意識化が十分にできているかは疑問が残り、また、結果として集団を意識させてしまったり、集団と集団の間の境界を強調してしまったりするなど、自分と他者という二項対立を乗り越える上での限界点も課題として挙げられた。

【研究の目的】

当該の交流活動において、自分とは異なる「他」ではなく、それぞれに異なる「個」に対する理解を基に言語や話者の中に存在する多様性への気づきを促し、理解を促進させることを目的とした。具体的には、以下の2点を明らかにし、多様性への意識化を促進するための具体的な方法を共有することを本研究の目的とした。

- 1) 小学生が意識すべき言語と話者の中の多様性とは何か。 2) 多様性に対する理解を育むための活動とは何か。

【実践の概要】

私立A小学校および公立B小学校において、小学生と留学生の交流活動を行った。内容は各小学校の担当の教員とともに相談の上、「プロセス・モデル」(Pettigrew, 1998)を参照しながら、小学生と留学生との交流活動という場において、具体的にどのような活動が考えられ、どのような効果が期待できるのか、さらに、それらの活動を有益なものとするための要素とは何かを検討した。

	実践1 私立A小学校「味噌汁作り」	実践2 公立B小学校「地域の施設の看板作り」
目的	国際理解の促進 - 多様性に対する理解促進、キャリア教育	国際理解の促進 - 他者の理解とコミュニケーションの促進
参加者	小学校5年生77名、留学生9名	小学校3年生39名、留学生13名
実践の流れ	交流活動前 手紙交換、調べ学習、調理実習 交流活動当日 調理実習、留学生との活動 給食、学校案内 交流活動後 新しい味噌汁の検討、手紙の交換	交流活動前 手紙交換、調べ学習 交流活動当日 小学生による地域の紹介、地域の施設の看板作り 昼ごはん、学校案内 交流活動後 手紙の交換

【考察とまとめ】

活動実施後のアンケート調査を中心としたデータ分析からは、大きく分けて、1) 他者（留学生）の言語・言語使用に関するもの、2) 自身（小学生）の言語・言語使用に関するもの、3) 多様性と共通点に関するものという3点の気づきがあったことが窺われた。

言語が中心となりがちなコミュニケーション活動ではあるが、日本語という言語やその中にあ
る多様性だけではなく、話者や目的、コンテキストなどの観点からより言語というものを包括的に捉え、その多様性への理解を高めていく必要があると考えられる。また、コミュニケーションに参加する個と個が対等な関係にあること、そして、互いの努力が必要であることに気づき、様々な違いに対して寛容な姿勢を持った上で、相手の心情に寄り添ったコミュニケーションが目指されるべきである。

そのためには、「個」との接触、そして、対話を通して、個への理解を深めるとともに、気づきを促すような機会を持ち、さらには、他者に対する理解だけではなく、その他者と自分がどのように関わっており、どのような差異や共通点があるのかに関しての内省へとつなげることにより、言語と話者の中の多様性への理解が可能になると考えられる。

【開発したリソース】

セカイの日本語～みんなの声～ <https://globalnetworkproject.wixsite.com/main>

